

読書

『飛騨遊記』は、私家「飛騨幻想」となっている。版で限定七十部という、作者の関野準一郎(青森県図書館の蔵書の中でも森貝出身、一九一四〜八希こう本の一つ。十四丁八)は版画家で、版画技の和紙を半折にして和と法に優れ、その作品は海じにした文庫本ほどの大外でも高く評価されている。雑誌「中央公論」の表紙絵や東海道五十三次調とした十四枚の美しい

県図書館に行こう

こんな情報^①が待っている。

版画を中心としてつづられた紀行文である。しかし、単なる旅の記録というより、作者の心に忘れたがたい印象を残した飛騨から信濃へかけての旅の思い出、また深山独特の雰囲気膨らませた「飛騨遊記」の講師

『飛騨遊記』 深山独特の幻想さ醸す

として高山を訪れた。三日間にはわたる版画教室のほか、盆踊りや葎草焼の絵付けを楽しみ、静かな山の街を散策している。帰途は、安房峠を越え信州へ向かった。途中、平湯温泉では、暗い灯火の下で湯船につきり、不思議な体験をする。



美しい版画を中心に紀行文がつづられている『飛騨遊記』

岐阜県を舞台とした泉鏡花の小説『高野聖』は旅の僧が語る若き日の体験談で、飛騨の深山で遭遇した妖(よう)術を使う美女の話がよく知られるが、準一郎は、奥飛騨の湯でまさに旅僧の幻影と同じものを見たようである。

『飛騨遊記』が刊行されたのは五一年、飛騨を訪れた二年後のことである。鏡花の文体を見事に視覚化したこの作品は、おそらくごく少数の人にしか知られていない。「飛騨版画」にかかわるエピソードとして、関野準一郎の高山訪問はちよっとうれしい出来事と言える。

BOOK REVIEW